

## 将来の「教材化」を目指した言語資料のコンテンツについての考察 奄美大島瀬戸内町での事例を通して

前田達朗

### はじめに

今回の文化庁の事業による調査の成果は、最終的にはアーカイブ化され、これら危機言語の研究者だけでなく一般の学習者に資するものとなることが期待されている。Web上でこれら資料にアクセスできることで新しい展開の可能性がひらけてくる。これまで琉球諸語の学習が、地域言語に直接関わる人々と地域社会、すなわち現場での「継承」が主に想定されてきたのであるが、当該地域から離れた場所からも情報を得られ、移住者やその家族、コミュニティでの活用も考えられる。

もちろんこれまでもネット上に様々なコンテンツが存在している。今回扱う奄美語についても、沖縄言語研究センターの「奄美方言音声データベース /<http://133.13.160.25/rlang/amm/index.html>」<sup>1</sup>は大和村出身の長田須磨の長年の業績である北部方言のデータを中心に早くから公開されており研究者にも使われることが想定されたものである。クリックすれば音声が出るというシンプルな使いやすいインターフェイスである。五十音順、カテゴリー別の検索も可能でさらに語彙数が増えれば辞書としての機能も持つことができるであろう。

You Tube などの動画サイトはさらににぎやかである。その質や目的はともかくプロでなくともコンテンツを作ることができ、言語だけでなく文化・芸能の記録としても媒体として有効であり、固くまじめなものをすぐ作ろうとしてしまう「教育」に足りない部分も補ってくれる。魅力あるコンテンツとは何かを考える機会も与えてくれる<sup>2</sup>。

共有された書記体型を持たない少数言語研究には共通の課題である「記録」とさらには研究の枠からそれら成果を取り出し、地域社会だけでなく広く一般に還元する方法を考えた時、映像と音声は有効な手段だと考え、これまでいくつかの試みをしてきた。本稿ではその取り組みを振り返り、特に継承の場面で

---

<sup>1</sup> 2013年2月3日確認

<sup>2</sup> 奄美大島北部笠利町出身の人気ミュージシャン「カサリンチュ」「サーモン&ガーリック」のシマグチ動画が人気である。

のニーズに応えるコンテンツとは何かを探った事例から、アーカイブを作った後の活用法についての提言ができればと考えている。具体的には2012年度から奄美大島瀬戸内町で制作している「瀬戸内のシマグチ」の制作過程の振り返りと地域社会での反応を材料にする。

## 1 鹿児島県大島郡瀬戸内町の概要

瀬戸内町は大島南部の中心地である。人口約 8900<sup>3</sup>人で、1950年合併当時の1/3の水準にまでなっていて、奄美群島全体の中でも過疎化の進み方が激しい地域である。いわゆる「昭和の大合併」で一町三か村が合併した際小さな島が点在する景色が似ているという理由で「瀬戸内」という名前をつける。この合併についての町民の評価は厳しい。中心地である古仁屋以外の地区では急速に過疎化が進み、合併を悔いる声となる。かつてはそれぞれの地域の中心地であった集落では特に強い。この経験が2005年に行われた一島で一市を構成することを目指した合併協議から早々に瀬戸内町が抜けた原因であると言われている。「シマ」の人々は自分たちのコミュニティがより小さく弱くなっていく経験しか持ち得なかった。地域社会の弱体化が生活語である地域言語の衰退につながることはいうまでもない。

### 1-1 公民館と小中学校

古仁屋にある中央公民館と41の集落に「分館」があったが、2009年に分館制度が廃止された。集落の自主的な運営・管理に任せられ年間3万円の補助に留まり、事業だけでなく建物の維持管理などが相当に困難になっている。2015年に中央公民館が建て替えの予定で解体されたが、その後町長選挙で改革派が勝利、いわゆる「箱物」の計画が見直され、2017年2月現在建設は始まっていない。かつて公民館は「文化の中心」とされ、存在意義は住民の中で大きく、郵便局、学校とともに公民館があることで「一人前の集落」と考えられていた。公民館が担っていた社会教育活動の多くがこれら一連の動きの中で廃止・凍結され、それらの中にはもちろん「シマグチ」継承活動が含まれていた。各集落での子ども向けの「シマグチ教室」について言えば、かつてからプログラムの成否はそれを運営する集落の規模、住民のモチベーションの高さや、能力に大きく依存しており、「教えられる・教えたい人がいる」かどうかで集落ごと、学

<sup>3</sup> 2016年10月推計。この10年でおおよそ2000人減

校区ごとの温度差があった。シマグチ教室が開かれていたのは最盛期で18の集落だった。

瀬戸内町は奄美の中でも「シマグチ」伝承活動が盛んだと言われた地域だった。「子ども島口大会」は1994年に第一回大会が開かれ、2006年に「子供島口芸能大会」と改称されて続いている。子どもだけを対象とした催しとしては奄美で唯一のものである。学校の代表が出場することになっているが、全ての学校が代表を送っているわけではない。シマグチを指導できる教員が学校にはいないために、教え手を地域の老人に頼らざるを得ないという事情がある。教え手がない集落でも同様のことが言える。小中学校の教員に大島郡出身者がいる場合はともかく学校での継続的な指導は望めず、シマに根強い「鹿児島への不信感」も影を落としている。「シマグチ大会の前になると教えてくださいと言ってくる。そんなのじゃだめだ、と言ってやるのだが学校は本当はどうでもいいよだ」(04年 某集落の老人)という大会の審査員までつとめる老人のいる集落では、学校の協力が得られず公民館での活動がない。子どもと教える気がある老人と理解のある教員が揃って初めて継続的な教室が開けるといふ微妙なバランスの上に成立しており、教員の転入出、老人の体調、子どもの構成などで年ごとに状況が変化してしまう。10年以上にわたって継承活動の現場を見てきたが、共通する問題がいくつか見られる。まずそれぞれの「シマ」ごとのことばに強いこだわりを持っていることである。これは継承活動の強いモチベーションでもあるが小さな地域主義に陥ることを同時に意味している。これは教材・教授法の問題にもつながる。どうしてもそれぞれのシマでの努力には限界があり、共通した教材が準備できれば教える側の負担も確実に減る。数多くの研究がなされているが、「教材」として使うことを考えられたものはこれまでのところはない。これら地域の実態と伝承活動に関わる人々の声が、教材の作成を着想した。2000年代の前半の集落での活動が盛んであった頃と現状では大きな差がある。集落での定期的な伝承活動はほぼ途絶してしまった。ここまで上げてきた問題点がそのまま明らかになったと考えられる。ネイティブ世代の減少を考えるとそれを記録することも喫緊の課題である。こうして2012年に「瀬戸内のシマグチ」の制作に取り掛かった。

## 2 「瀬戸内のシマグチ」

### 概要

2012年に助成金を得られ<sup>4</sup>制作に着手できた。プロダクトとしては計120分の映像を収めた2枚組のDVDとシマグチ部分を書き起こしたものと日本語の対訳のテキスト70ページであった。テキスト250部とDVDを1000組プレスし、瀬戸内町をはじめ関係各所に配布した。町立図書館でも貸し出されている。また関東と関西の出身者団体「同郷会」にも受け取ってもらった。

### 2-1 編集委員会の構成

本節では本格的にコンテンツ制作にとりかかるまでの経緯を述べ、個別の事例および教材全体の構成の理解の助けとなることを目指す。制作にあたって編集委員会を組織した。その目的は、まず制作の主体をあくまでも地元瀬戸内町に置くことであった。これまでの伝承活動の研究において理解できたことなのだが、その主体が行政などにはなく、集落の人々の個人的な努力に依っていることの反映であり、またオマージュでもある。我々研究者は外部からその一部として関わっているという姿勢を、形式的にも示す必要があった。そして、瀬戸内の人々に自分たちがこの教材作成においても主体であることを自覚してもらい、忘れないための手立てでもあった。これらの目的は概ね達成できたと思う。

瀬戸内町在住で伝承活動及び社会教育関係者の6名と、共同研究者を含めた8名が、「瀬戸内のシマグチ」編集委員会を結成した。誰が「長」であるかを決めなかったのも編集委員会を設定したのと同じ理由である。

### 2-2 集落の設定

誰を編集委員会メンバーとするか、というのを考えることは、どこの集落を題材とするのかをあわせ考えることであった。既述の通り瀬戸内町は1956年に古仁屋町（東方村）、西方村、鎮西村、実久村が合併してできた行政区分である。しかし、旧来の区分けは人々にいまでも意識されている。ひとつにはかつてはそれぞれに村落共同体の集合体があり、それぞれの「中央」があったものが、古仁屋に行政・経済の中心が移ることで、それぞれの集落が衰退したと考えられているのも一因である。取り上げる集落を決めた理由は、簡単にまとめると以下のようなものである。篠川はいまでも比較的大きな集落であるが、際だった

<sup>4</sup> 博報財団「第7回児童教育実践に関する研究助成」

特徴はないが産業農林水産すべてがあり、古くからの集落共同体の雰囲気も残っている。誤解はないと思うが、シマの「サンプル」としては最適であると判断した。古仁屋は、港町として産業の中心として人口を集めた。ほかの集落と違って都市化した地域といえる。町の成り立ちの経緯でも触れたが、ほかの集落とは大きく違う特徴である。加計呂麻島の諸鈍は、「諸鈍シバヤ」<sup>5</sup>でも知られるが、シマグチが生活の中に存在し、歴史・文化的なコンテンツが豊富である。同じ加計呂麻だが旧村としては別の村である俵は、集落としても古く、集落民の手による民俗資料室があり、これを活かしたいと考えた。与路島は、人口が激減している。与路のことを記録するとすれば急いだ方がいいと考えた。もちろんこれらの集落を決定するに当たっては、もう一つの重要なファクター、協力者が得られるかどうかがあった。

これらを総合的に判断し、上記編集委員会メンバーに協力を依頼した。

### 2-3 篠川での習作作成と編集会議

編集委員会への参加を個別に依頼しそれぞれ快諾を得たが、企画を説明しながら、特に集落の編集委員には具体的なイメージが必要なことがわかった。そのために、全体の編集会議を持つ前に、篠川集落でパイロット版を撮影することにした。

「瀬戸内のシマグチ」の集落ごとのコンテンツは、大きく三つの部分に分かれている。スクリプトを書いて演じてもらう「会話」とそこから取り出した重要事項を確認する部分、集落の紹介、そしてその集落に独特のものを取り上げる部分である。取り急ぎこれら三つのパートを篠川で撮影し、ラフ編集をして、編集会議に臨んだ。撮影できたのは、「教材」部分と「集落紹介」であったが、イメージを結んでももらう効果はあったといえる。2012年5月に瀬戸内町立図書館で第一回の編集会議を開催した。目的はもういちど全体的な構想を説明し、仮編集版を見た。そこで出た意見と議論は、まとめると以下のようなものである。

#### ・「うまい人」に出てもらいたい

これは、シマグチの言語状況につながる話でもあるが、シマグチを話すことは、特別な場面と結びつく。本来のコミュニケーションの手段としてではなくイベントなどで披露するものであることがある。編集委員の一部にも、記録し

<sup>5</sup> 1976年国指定重要無形文化財 [http://www.setouchi-lib.jp/assets\\_j5.html](http://www.setouchi-lib.jp/assets_j5.html)

保存すべきは、「名人」のシマグチであるという意識があるようで、うちの集落ではお年寄りの名人をそろえようというコメントがあった。「上手ではない」個人を積極的に取り上げることが必要であることを確信した。

#### ・敬語の扱いについて考えたい

避けては通れない課題である。結論をいうと最後まで「揺れ」があった。複雑な待遇表現の体系を本来持っていたシマグチであるが、それらは封建的な身分制度にも関連しており、現在では母語話者にも説明ができない部分がある。敬意が過ぎない表現を使うことを求めるにとどめたが、全体を通じて共通の見解を編集委員全体で持ち得たとは言いにくい。従って本教材の中での「敬意の高さ」は、各個人でも厳密に言うとは揃っていない。

#### ・集落「シマ」の紹介は、文化財などよりも、いまの生活について積極的にとりあげる

名所や旧跡、歴史的なものの紹介で最初の篠川の集落紹介は構成されていた。外からやってくる人相手に説明をしたり、町の方から求められて集落史のようなものをまとめ、書いたり話をしたりした経験によるものである。しかし、これらのうちに個人の業績を顕彰するものなどはあえて扱わない方がいいという意見が出された。なによりも昔語りばかりになってしまっただけでは退屈なコンテンツとなる可能性があった。現在も実際に見れるものにも積極的に触れてもらう必要もあると考えた。そのほか解決すべき技術的な課題も見つかった。「習作」としてしまうと申し訳ないが、この過程を経たことで大きな進展があった。またテキスト化する際のかな表記については、編集委員それぞれの表記法をできるだけ尊重することを申し合わせた。無理な統一はしないことにした。

### 3 構成について

本章ではこれらの経緯を経て最終的に確定した「瀬戸内のシマグチ」の全体的な構成について概括する。

#### 3-1 集落編

前述の通り、5つの集落を題材に制作したものは、大きく三つのパートにわけた。ここでは5集落に共通の制作の過程をまとめる。

### 3-1-1 「教材」

会話を中心としたいわば「教材仕立て」のパートである。たとえば語学教材であれば、文法事項を設定し、それを盛り込むことが最も重要になる。さらに習熟度を考え、簡単なところから複雑なものへと積み上げて行く。たとえば日本語だと名詞文から動詞文、単文から複文へと進んでいく。多くの語学教材が最初は「つまらない」のは仕方のないところもある。当初はこの手順を踏むことを考えたが、単発に終わる可能性もある中でこうした手順が優先させるべきものかということを検討した。そのため文法事項ではなく、その集落を舞台にして不自然ではなく、かつ使う可能性が高い表現をまず考えた。序数、移動、指示詞、親族呼称、基本動詞、疑問詞、地名を盛り込むことを考えた。かつ子供が興味を持てるようなコンテンツにするべく、話として完結し、ストーリーがあることを目指した。スクリプトを日本語で作成、集落の編集委員に翻訳を依頼し原稿を作成、それをもとに検討を重ねた。台本を演じてもらう形になるわけである。本編ともいえる会話に引き続いて、重要事項をとり出した部分の構成は、前田が決めた。

### 3-1-2 「集落紹介」

今回の研究計画のもう一つの重要な柱が、シマグチの記録である。「教材」が演じてもらう部分だとすれば、ここはできるだけ自然な談話を取り入れたいと考えた。この部分については、最初から編集委員を主体としたそれぞれの集落の方に依頼した。これは既述のように、地元の人々に主体性を持ってもらうということと、スケジュール的な関係で、我々が不在の間にも製作がすすむ部分が必要であった。篠川の仮編集のところでも述べたが、過去の話だけで構成されることは避けたかったが、それでもそれぞれの集落のプライドにつながる歴史をないがしろにするわけにはいかない。「集落の歴史、現在の産業」について話をしてくださいという大きな枠だけを設定し、できるだけ編集委員が準備したものを尊重した。この部分の最大の難関は書きおこしであった。「教材」では最初から文字化を前提として、シマグチ訳も予め用意できたのだが、それぞれ自然になればなるほど、自身の話したことも含めて、文字へとあるいは日本語への翻訳が困難であった。「母語話者」ゆえの行き詰まりであったが、製作を進める中で介入できるようになってきた。

この部分はもちろん、単なる記録ではなく、シマグチ教材として、読み物としてあるいは郷土のことを知る手がかりとして十分に役立つものになったと考える。

### 3-1-3 集落ごとのコンテンツ

このパートは、一般化しにくいところである。共通しているのは、とりあげるべき題材を含めて誰が主導するということなく話し合っただけで決めたということである。詳細はそれぞれの集落の事例で触れる。

### 3-2 芸能編

芸能編を着想したのは、奄美では、伝統文化が子供たちに近い距離にあり興味をひくコンテンツであること、そして特に若いアーティストの姿はさらにその距離を近づけるであろうと考えたからであった。また諸鈍集落だけでなく瀬戸内町が誇る伝統芸能「諸鈍シバヤ」を扱わないわけにはいかなかった。この編については、ここで詳細を述べておく。島唄については、瀬戸内町出身のアーティストに出演を依頼した。諸鈍シバヤについては、2012年10月のものを撮影、編集している。いずれのアーティストも主旨に賛同し無償での演奏だった。また曲の演奏と合わせて、子ども向けのメッセージも依頼、その模様も収録した。実は瀬戸内出身で在住のポップ・シンガーとしても全国的に有名な女性歌手の出演も探してみたが、所属事務所を通さなければ一切の露出ができない契約らしく断念した。テキストにはアーティストの解説のみを付したが、伝統芸能を知る教材として使用に十分耐えるものになる。またそれぞれのアーティストのメッセージは、自由に話してもらったのだが、島唄やシマグチが、故郷を離れた奄美出身者にとってどのような意義があるかを偶然にも三組とも語ってくれた。

### 3-3 「島口ラジオ体操」

「島口ラジオ体操」の詳細については本編に詳しいので重複は避けるが、7月にCDが発売されてから瞬く間に奄美群島中で話題になり、地域・学校の行事で使われ、子どもたちもよく知るものとなった。制作にあたったNPO「環境教育協議会」も「瀬戸内のシマグチ」の制作意図を説明すると、使用を快諾してくれた。「瀬戸内バージョン」があったのは幸いであった。

このパートは当初は「古仁屋編」の一部として考えたが、協議して全体のエンディングとして使用した。「オリジナリティ」という意味で議論になったが、たとえば島唄も、かつては誰かの創作なわけである。今後もこの島口ラジオ体操が人々に親しまれるであろうことと、同じ時期にシマグチの復興を目指したプロジェクトがあったことに偶然以上のものを感じて、こういう使い方をした。

## 4 集落編制作での問題点

ここでは未解決の課題も含めて、制作していく中で起こった問題を挙げ、今後同様の研究を行う際の参考にするべく報告する。

### 4-1 表記の問題

全集落に共通したが、本編をテキスト化することを決めてから制作・テキスト編纂の最後までついてまわった問題である。既述の通り、集落の編集委員の表記法を尊重する、とコンセンサスをとったが、同一の個人の中での揺れ、あるいは編集委員の間での正しい・間違っている、の議論は続いた。もちろん正書法のない、あるいはかな表記がなじまないというという想定はしていたが、文字化の経験のない編集委員もいた。第一回編集会議では地元編集委員のうちの一人に「表記の統一」を依頼していたが、今後の地元編集委員同士の関係と作業の効率を考えて、我々が責任を持つという方針に途中から変えた。今回のテキストを通じて、完全には「統一」がとれているとは思えない。あるいは学習者に混乱や負担がおこるかもしれない。この点については実際に使用してもらってからのフィードバックもあった。また IPA を用いるかどうかは今回は議論しなかったが、今後の課題である。

### 4-2 翻訳の問題

編集委員やその周辺の協力者は、伝承活動に関わった経験はあるが、それまでの経験は様々である。もちろんシマグチを教えるプロは存在しないのだが、教員経験者も含め教育歴や職歴など様々で、それぞれの集落での取り組み方も様々であった。実はこうしたそれぞれの経験の違いが最も現れたのが、日本語共通語とシマグチの間での翻訳であった。おそらくは外国語の学習経験によると思うが、どうしても母語である話し言葉のシマグチと、それを書き言葉とするということが結びつかないという現象がおこったのである。話し言葉と書き言葉の距離を経験することが少なくなった現在、今後考えなければならない課題の一つである。

### 4-3 「できる」ということ

まず強調したいのは、第一回編集会議についての部分で触れたように、母語としてシマグチを獲得した世代が少なくなった今、「学習言語」としてシマグチを身につけた人々が存在することについての地元での理解が行き渡っていない、ということである。篠川と諸鈍の集落紹介をしてくれたのは、それぞれ地元での生活経験の短い人であった。年代も話者の中では比較的若い。それでも編集委員の依頼で協力してくれた人々であるが、明らかに様々な違い、たとえばアクセントが日本語寄り、音声的な変異、などが見られる。しかし、これも現在のシマグチの状況を現す記録であるとともに、若い世代にとっては、学習によってこのレベルまでくることができるといえるというモデルである。また、30代の出演者については、その場で「口移し」で覚えてもらうというような事例もあった。彼らの生活言語は日本語を基層とした現行の方言である。しかし、独特のアクセントやイントネーションなどは身につけており、その場で覚えるということが可能であったということは、シマグチの習得は可能性があるということでもある。古仁屋編に出てもらった秦珠奈(たいじゅな)さんは、中学二年生(当時)であったが、祖父母に主に育てられたためシマグチの相当の運用能力がある。「年寄りのつかうもの」というイメージがかなり強いシマグチに、こういった若い話者がいることを同年代の子供たちが知ることの効果は計り知れない。

一方「シマグチの名人」として紹介された人が、シマグチでついに話せなかったという事例があった。古仁屋編での集落紹介は、それぞれの出身集落の話をしてもらうと言うテーマだったが、ほかの参加者の前で「教養が邪魔をして方言で話せない」と言ってしまった。これを機に「話せないのに話せるふりをして、シマグチ大会の審査員までしていた人」という評価になってしまった。この人を非難するのは簡単なのだが、問題は別のところにある可能性がある。つまり、改まった場で日本語共通語以外で話をする経験や能力が誰にでもあるわけではないのである。前節の「翻訳」にも通じる問題である。年齢や生活歴から考えるとまったくシマグチの運用能力がないとも考えにくいからである。複雑な背景を持った言語を扱うにあたっては、こういったデリケートな問題が起こりうることを改めて記しておきたい。

## 5 集落編の概略と解説

ここでは本編のメインの部分である集落編の、それぞれの項目について、収録順に要約と解説をくわえる。以下数字は本編にならう。

## まえがき

この映像教材のねらいを、子供向けと大人向けにあげた。編集委員会全体の意図するところである。

## しのかわ（しのほ）へん／篠川篇

### 1-1 みてう うていたぼれ／みつつ売ってください

食料品店での買い物の場面。ここでのねらいは序数詞、指示詞である。名詞文と疑問詞をふくめた文章を盛り込んだ。「よろず屋」的な商店での買い物という、日常的な場面を設定した。すべてのプログラムの中で最初の撮影・制作であったため、音声の問題、長さ・量のバランスなど、解決すべき問題があった。地元商店の協力により撮影できた。

出演；計省造（編集委員）計隆徳

### 1-2 ものと場所を指すことば／かずをかぞえよう

1-1でのポイントを取り出したものである。アニメーションを入れるなどのアイデアはその場で話し合いながら積み上げていった。

出演；勇和江、計省造

### 1-3 しのかわ（しのほ）ぬしょうかい／篠川の紹介

一般的な紹介、ということになったと思うが、ほかの集落においてもここでの形式が踏襲された。その意味で有用な習作となった。金井直利氏は年上の方に指導を受けながら話をしてくれた。シマグチ学習者の一例である。

### 1-4 八月踊り

すべての集落に独特の八月踊りがあるが、人口減や高齢化で行事が維持できない集落が出てきている。篠川は毎年盛んに行っているため、集落の人々の自負もある。しかし、今回収録した映像は最近のものではなく、十年前のものである。この十年前を最後に特に若年層の人口・参加者が減り、最後に大規模に踊った映像が残っていたからである。画質・音質ともに現在の水準からすると劣るものであったが、地域主導ということで、何を見せたいかを優先することにした。

## ひゅうへん／俵篇

### 2-1 くっりや めうだりょうおるかいは？／これはなんですか？

ここでのねらいは名詞文のうちでも疑問詞、さらに「使う」「する」などの動詞と疑問詞とのくみあわせである。それと同時に俵集落の貴重な財産である民俗資料から近現代のシマの暮らしを伝えることを目指した。俵集落では編集委員でもある袴一男氏が語りもひとりで全部つとめてくれた。かつては老人会を中心に伝承活動のモデルとして紹介されたこともあるが、メンバーが減り、袴氏の判断でこの形態をとった。我々の想定とは違う形になったが、今後も特に小さな集落ではありうることである。

### 2-2 瀬戸内のシマの名前

袴氏の得意分野でもある民俗史のうち、漢字の地名が本来であると誤解されていることの多い地名をとりあげた。歴史的な変遷や異説もあるところだが、ひとまず「平凡社 地名辞典」と袴氏の知識との突き合わせ、町健次郎氏との議論の中で現存の集落の旧地名を網羅した。

### 2-3 ひゅうめしょうかい／俵の紹介

ここでも袴氏の、特に自然信仰やノロ信仰についての知識が発揮された。民俗資料として貴重な語りだと思う。このように話すべきことを持ち、それを自身でプロデュースできるような能力のある個人がいる場合は、こちらの設定をこえてもその人のやりやすいようにするべきである。「記録」のためにはそれが最善であろう。

### 2-4 ひゅうこじまめむんがたり／俵小島の物語

かつては小中学校で地域のこども相手によく使われていた伝承活動のコンテンツに、昔話がある。いまでは小学校教員の協力も得られず語られる機会もなくなっていくつかの話のうち、この話をかたってもらった。全編シマグチだけで語ったことは袴氏にとっても初めてあり、貴重なものとなった。

## しょどん（しゅどん）へん／諸鈍篇

### 3-1 うらや うじで うっかな あんまじゃもんや／

#### あんたがおじさんでかあちゃんはばあちゃんだもんね

ここでのテーマは親族呼称である。語彙として必ず必要なものであるだけでなく家族を通じて地域社会への興味・関心のきっかけになる可能性もある。「とうしのゆえ」（歳の祝い）という今も続く親族・地域社会をまきこんだ祝い事には、あらゆる親族が招かれるので、題材としても身近なものである。ただ、年代や集落によって差が激しい語彙群であり、ほかのバリエーションについてどう扱うかという課題は残した。

出演；林京子（編集委員）、徳本明人

### 3-2 家族と親せき

家系図のアニメーションを作成し、音声とともに可視化することで印象に残るように考えた。しかし本編の中に現れるものと食い違いがあったため、音声処理などに時間がかかった。

声；徳本明人

### 3-3 しょどん（しゅどん）ぬしょうかい／諸鈍の紹介

古くからの加計呂麻の中心地で、産業や歴史的な文物も豊富な諸鈍であるが、ほかの集落とのバランスをとることに苦労した。当たり前のように「諸鈍シバヤ」についての語りが準備されたが、シバヤは芸能編で紹介することにし、シマの暮らしの中で祭りに向けて準備する人々の様子を取り入れた。またかつての封建的な身分制度の上位にあったことを誇るような語りは、映画のロケ地であった話と差し替えた。人々のプライドを傷つけず、かつほかの集落の人々が見ても誤解のないコンテンツをつくることに心を砕いた。語りを担当した上田敏也氏も、諸鈍生まれではあるが、シマグチは学習言語である。

### 3-4 すいたつくり／砂糖作り

いまでも続く産業として、精糖を題材とした。かつては数が多かった製糖工場も少なくなる中、加計呂麻では付加価値をつけて高級品として生き残りをはかっている。工程を説明するナレーションは動きやそのアスペクトを示す語彙が豊富で、初級よりも上の学習者にはいい教材になり得る。声；上田敏也

## ゆるへん／与路篇

### 4-1 だーはちいきゅちな？／どこまで行くの？

与路は離島としての「不利さ」が際立っている。ほかの集落以上に厳しい自然も相まって人口流出が止まらない。その中で人々の生活を描くにあたって海と船をテーマにした。瀬戸内町の子どもでも行ったことがない子どもが多い場所でもある。そして学習者にとって早い段階から重要なものだと考えられる、移動をめぐる様々な表現はこのテーマと非常になじみがいいと考えた。距離もあり、天候の影響をいちばん受けた集落であったが瀬戸内の中でも特に独特だと言われる保島豊氏の与路方言を記録できたことも成果である。古仁屋出身の平田誠氏が、若い旅人役として、流ちょうではないが一生懸命にシマグチを話そうとする姿勢も、本研究の目的のひとつの具体化である。

出演；保島豊、平田誠

### 4-2 移動をあらわす文

起点、経由、目的地を現す表現と、少しではあるがアスペクトに触れることをめざした。

また本文中にはないが、時間の起点と終点を現す表現が、場所のそれとはシマグチでは異なるため、特にとりあげた。

声；徳永允（編集委員）イラスト 岩元剛

### 4-3 ゆるぬしょうかい／与路の紹介

与路での撮影がかなった貴重な機会を活かしたと考える。集落のコンテンツとして数年に一度行われるサンゴの石垣の積み替えを計画していたが、台風で与路港が破壊されるなどの損害があり島に行くことが困難になり、復旧作業などに集落の人々が追われ、かなわなかった。そのため与路編はほかの集落に比べて短くなっている。また当初は保島豊氏によるナレーションを計画していたが、古仁屋に録音にきてもらうことに困難があった。従って自身与路出身である徳永允氏に担当してもらった。

## くにゃへん／古仁屋篇

### 5-1 かりゆんことうが だけりょうおんにゃ？／借りることができますか？

古仁屋では場面重視のコンテンツを考えた。図書館というなじみのある場所、

島尾敏雄や元ちとせという瀬戸内に縁の深い人物を登場させるなどの工夫をした。また現役の中学生を登場させることで、子どもたちとシマグチの距離を近づけることを考えた。図書館職員役の義永氏も、シマグチのできない世代であるが、事前に練習をして臨んでくれた。

出演；秦珠奈、義永正輝

## 5-2 動きをあらわすことば

文法的なパラダイムを示した。シマグチの動詞にももちろん活用があることを理解してもらえれば成功である。文法事項の教え方が難しい、子どもたちの集中力がもたないと言われていた中でのひとつの提案である。

出演；秦珠奈

## 5-3 シマジマぬくとうば／いろいろなシマのことば

このパートは、古仁屋の集落紹介にあたる。既述のように、古仁屋はほかの集落との決定的な違いがある。近代以降都市化が進み、古仁屋以外の出身者が人口の大半を占めている。そのことが古仁屋の特色であることをわかりやすくするために、今回取り上げなかった集落の出身者で古仁屋在住の人々に集まってもらった。元町長で伝承活動の象徴的存在でもある義永秀親氏を迎え、長時間の談話が記録できた。

出演；義永秀親、中島良、川上ムツ子、昭島良江

## 6 テキストの編纂

DVD をメインにした映像教材としたため、テキストは副次的なものと位置づけたが、制作についてはかなりの労力と時間をかけた。「テキストがある」ことは、その存在自体が瀬戸内の人々の意識に訴えかけることは大きいと思う。あくまでも「瀬戸内の子ども向け」であることを目指したため、瀬戸内町や奄美語についての基本的な情報は記載しなかったため、瀬戸内町の外に配布するぶんについては、簡単な解説を挿入した。

## 7 瀬戸内での反応

2013年の3月の完成直後にはちょっとしたお祭り騒ぎになり<sup>6</sup>、地元メディア

<sup>6</sup> <http://higyajiman.amamin.jp/e325348.html>

にも取り上げられた<sup>7</sup>。瀬戸内町の行政、町長や教育長からも今後の「活用」について考えたいとのコメントもあった。編集委員会の人々も含めある種の達成感があった。その後瀬戸内町役場を通じ 41 集落と小中学校、古仁屋高校などに配布された。出演者などにも配布され、町内にはある程度行き渡ったはずであった。

6月になって状況を知るべくまずはコンテンツを収録した5集落の関係者から話を聞いた。共通していたのは自分の集落が含まれたコンテンツ以外はほとんど見なかったということであった。集落の名前をタイトルにしたものとは別に「芸能編」としてシマウタなどを収録したパートがあるのだが、そこを少し見たという回答があった。高齢者のみならずその合併を経験していない世代にも「旧村」が強く意識されている。「地域主義」的なものは根強い。そのためそれぞれの旧村から一つずつ題材とする集落を選ぶ方針は、編集委員会の中で賛意を得た。逆にこのときに他の地域や集落には興味が無いということに考えが至らなかった。それぞれのパートに集落の名前を冠したことで、自分に関わりがある・ない、の判断が働いてしまったのだ。その後この5集落以外の場所で「瀬戸内のシマグチ」の認知について聞き取りをするのだが、自集落の近くあるいは親族がいるなどのなんらかのきっかけがないと見る動機にならないことがわかった。興味をもって全てを通して見たというコメントをくれたのは、「I ターン」と呼ばれる移住者の人だった。

さらに深刻だったのは、これら5集落には編集委員が必ず一人はいたにも関わらず「子どもに見せる機会を作った」という回答が皆無であったことである。編集委員は子ども向けに伝承活動に関わってきた人々に参加してもらっており、もちろんこれら映像コンテンツの目的は何度も説明し理解してもらっていたはずであるが、見せた相手はもっぱら高齢者だった。そしていま一つの大きな誤算は「DVD プレイヤーが普及していない」ことであった。これまでの現地での研究調査の中で、もちろん個人宅にあげてもらうことは何度もあった。PC も AV 機器も見かけたように思ったがたとえば D 集落ではポータブルの DVD プレイヤーを買うことから始めたという。

## 8 学校での反応

2016年9月に二度にわたって瀬戸内町内の14ある小中学校の内12校に訪問、校長に聞き取りを行った。

---

<sup>7</sup> <http://tundie.blog.jp/archives/7858611.html>

- ・「瀬戸内のシマグチ」の認知
- ・内容を見たか
- ・評価
- ・担当教員個人のシマグチと伝承活動への興味
- ・地域の活動との連携・コミットメント
- ・「子ども島口大会」への取り組み
- ・シマグチ継承の意義
- ・その他（教員の構成、児童生徒の構成など）

「瀬戸内のシマグチ」は学校での使用も視野に入れて作成した。これは編集委員会のメンバーだけでなく、奄美そして琉球語圏全域に言えることであるが、学校教育の中で「方言」が奪われたという記憶が強いことがその理由としてあげられる。今でこそ学校で禁止されることはなくなったが、かつて学校は方言撲滅の一つの象徴であった。<sup>8</sup>さらに地域社会の中での学校の「権力性」も付け加える必要があるだろう。学校を持つ集落はそれを自分たちの集落が持たない集落に対して優位であると考えて来た。実際人口が多い、すなわち産業があり豊かな集落であることのわかりやすいしるしであった。さらに近年の少子化で休校・廃校が相次ぎ、学校のそういった象徴性はより強くなっているともいえる。郵便局とともに「中央とつながる」感覚は、都市部に住む人間には理解しにくいものだと思う。そういった通常期待されている以上の役割を与えられている学校でシマグチが教えられることは、わかりやすいシマグチの「復権」なのである。

学校ごとの対応の「ばらつき」は、教員個々人の「興味」によるということであろう。質問項目のうちの「教員の構成」で最も重要な質問は、教員（職員も含む）のうちどれくらいが奄美（大島郡）出身者であるかということであった。

鹿児島県の小中学校の教員は1970年代半ばに導入された「三地区制」と呼ばれる勤務地のローテーションの制度がある。これは離島部に赴任を希望する教員が少なかったこと、1945年まで、米軍占領期に教員になった地元出身者が多かった奄美で、その年代の人々の退職が始まり教員の数が不足したからだとされている。傾向としては、教員になりたての若い時期にその「義務」を果たし多くは三年程度で島を離れるか、教頭や校長の管理職になってから赴任するか

<sup>8</sup> 前田達朗 2010

のどちらかの場合が多い。

大島郡出身者の教員の場合、奄美勤務を希望する者は認められることが多いとされている。また臨時採用の教員や、事務職やいわゆる用務員は現地採用のために構成員全体で見ると奄美出身者の教職員が一定割合で学校現場にいることになる。奄美出身者であれば必ずシマグチに理解があるというような断定はできないが、鹿児島出身の教員に時折みられるある種の偏見は少なくともない。

とはいえ3年から5年で教員の構成は全く変わることが宿命づけられており、その都度学校と集落の関係はかわり、シマグチへの取り組みも安定しているとはいえない。集落の人々もその点はよく理解しており、奄美出身の校長教頭の赴任は歓迎される。かつての歴史的な経緯から、鹿児島出身の教員については評価が厳しい時があるのも事実で、うまくいかないときには「あの先生は鹿児島だから」で片付けられてしまう。学校と集落の関係はその教員、特に管理職の離任まではぎくしゃくしてしまう事例を筆者もいくつか見ている。

またもう一つの理由として小中学校の、特に正課の時間の余裕のなさであろう。シマウタやシマグチの活動はどうしても課外になり、生徒をどのようにつなぎ止めるかという別の問題が出てくる。そしてここでもやはりメディアをどのように見せるのかという問題が出てくる。どの学校にも再生装置とモニターはあるのだが、子どもを集めて時間を作るという方が問題となってくるようだ。

## 9 「瀬戸内のシマグチ」の与えた課題と『瀬戸内のシマグチ2』

地域社会、行政関係者、学校関係者などへのフォローアップ調査のうち、集落と学校の話に少しずつ立ち入ったが、次への課題としての問題点が見えてきた。以下特に続編を立案する際に考慮に入れたものを中心に列挙していく。

### a メディアの形態

既述の DVD という配布の形が予想外な障害だったということ以上に深刻だったのは、「瀬戸内のシマグチ」が映像媒体ではなく「本」だと理解されていたことである。これはその体裁によるところが大きいであろう。確かにそれは本に見えて、メインであるはずの DVD は巻末の付録だと思えない。説明文をつけ、テキストはあくまでも映像を補うものであることを強調したが、「おもしろく読みました」のような感想があった。

また数冊を寄贈した町立図書館でも、本館と移動図書館それぞれで何度か貸

し出しされているが、DVD は未開封のままである。「開けてはいけないもの」と思われるようである。またコピーすることを前提とした製本も、ページを破ることに抵抗があると複数の感想を得た。これらの問題を解決することが課題となった。

#### b コンテンツの問題、特に長さについて

「瀬戸内のシマグチ」は大きく6つのチャプターにわかれ、さらに全部で30を越えるコンテンツタイトルがある。最初の取り組みということで欲張ってしまったことは否めない。地元からの編集委員や集落の人々の希望をできるだけ取り入れようとした結果でもあるため、その点では目的は果たせたが、編集で簡単にカットするというわけにはいかなかった。使いやすさという点では「記録」と「教材」が混在する中でわかりにくいものになったとも言えよう。特に5分を越えるような長いプログラムは見る側の集中力を欠くことも理解できた。なにを優先するか、見せたいものはなにかをはっきりさせること、色々盛り込むことで散漫になることを避けることが次の展開につながると考えた。

#### c 「規範」との対決

巻末の学校調査にも一部反映されているが、「正しいシマグチ」という意識が人々の中に確実に存在する。正しさは古さであり、年長者が話すシマグチはより正しいとされる。これはなにも瀬戸内や奄美に特有の意識ではなく、世界中の継承が危ぶまれる危機言語話者コミュニティに見られるものである<sup>9</sup>。これを「古典主義」と言い換えれば、あらゆる言語に共通しているとも言えよう。しかしそういった規範主義は言語の継承の妨げにはなっても助けにはならないことは明らかである。そのために若い話者や運用能力が発展途上の話者を積極的に起用したが、こちらの意図がうまく伝わっていない場合がいくつかあった。またここに前述の「地域主義」が顔を出すことがある。「シマグチ」や沖縄の「しまくとぅば」は言語の「固有名詞」もしくは「総称」ではないと言える。本来シマとよばれるそれぞれの集落共同体に「特有」だと考えられていることばの一般名詞であり、「瀬戸内のシマグチ」という名付けそのものがある種の矛盾を

<sup>9</sup> 世界中どこでも「いちばん上手な人は誰?」「うちのばあちゃん!」というようなことが繰り返されていると国際学会などでも話題となる。そしてその「ばあちゃん」に同じことを聞くと「うちのばあちゃん」というはずである、と。”Who is the best speaker?” “My granny is”とでも訳せるのか。

抱えることは既に述べたが、シマごとの違いは現実ではあるが場面によっては誇張され、もはやその違いがわかる人、使い分けができる人がいないような状況でもこの言説だけが生き残るのは「ばあちゃん最強説」同様にシマそのものの存続が危うい現状では拘泥することに意味は無いといえよう。この点についても繰り返し訴える必要があるだろう。

#### d 学校からの「切り離し」

1-3 で述べたことの繰り返しになるが、人々の意識の中にあるシマグチの衰退への学校教育における「補償」の要求と学校現場の現状はあまりにもかけ離れている。沖縄県域との大きな違いは、奄美が教育を含む行政を鹿児島に支配されていることである。奄美群島だけで独自のことをすることは難しい。もちろんその範囲でできるだけのことを行っている学校や教員個人もたくさんいるのだが、限界はある。さらに生活言語である「シマグチ」は本来集落共同体のコミュニティ言語であり、その中で育まれ伝えられてきたものである。この「原点」に回帰するべく、学校以外での教育、たとえば公民館活動などの社会教育に「返す」手段となり得る方法を提案することが求められると考えた。これはもちろんコミュニティの人々の意識を変えることも含んでいる。

#### e 編集に関わるスタッフについて

「瀬戸内のシマグチ」では我々と地元の伝承活動に関わっている/関わっていた人々で編集委員会を組織し編集にあたった。伝承活動の主体は地元の人々であるべきだという考えからである。もちろんこの考えは今も変わってはいないが、これまで述べてきたようなシマグチを取り巻く環境に変化を起こすためには、従来の「送り手はネイティブ世代」という構図を変えることも方法の一つだと考えた。またよそ者である筆者ら研究グループは彼ら・彼女らに依存していたともいえる。そのため今回は研究グループと、若手の「唄者」（詳細は後述）、撮影・編集担当者だけで製作することを試みた。もちろん前回の編集委員と周辺にはきちんと説明をしたうえで少人数での作り込みを目指した。

## 10 研究と制作計画について

1 で述べてきたような背景から「瀬戸内のシマグチ2」の研究計画は次のようなものとなった。

主に公民館活動など社会教育の場面での教材の活用をめざす。また運営側に特別な知識や過度の負担がかからないようなプログラムの設計を実際に活動をしながら行う。その目的は

- ①伝統芸能や地域活動、風物などを題材とした教材と日常の活動を通じて、子どもに伝統的なコミュニティは現在も有効で、その地域社会に育まれているという感覚を獲得すること。
- ②これまで「方言」だと貶まれてきた歴史社会的背景に気づき、自分に関わりのある言語と文化について正しい理解をすること。それらを通じて「古くさい年寄りの使うもの」という言語意識から解放することで言語継承への意識が高まること。
- ③学校現場では郷土教育の教材として活用できる。また奄美以外の出身の教員にとっても奄美の理解に有用なものとなり得ること。

③についてはこれまでの議論と矛盾するかのように見えるが、活動の主体としての集落共同体とする際に学校が完全にその外にあるとも言いがたい。重要なのはむしろ人々の意識の問題で、学校を複数ある装置の一つと考えれば利用価値のあるものであることは間違いない。

またこれまで「高齢者」と「こども」の関係にのみ限定されてきたシマグチの伝承活動を集落共同体全体が主体であるとする、言語そのものを教えるというところから、言語を媒介とした文化に興味を持つようなコンテンツを目指すこともあわせ骨子とした。そして教材の作成にとどまらずそれをどのように使っていくかの提案までを目指すこととした。

### 10-1 コンテンツ作成①～シマウタを素材に

危機言語を扱う国際学会 Foundation for Endangered Languages は2016年の大会で20回目を迎えるが<sup>10</sup>、2015年のルイジアナ、チューレーン大学での大会のテーマは” The Music of Endangered Languages”であった。つまり危機言語の維持に音楽がいかに貢献できるのかというもので、二日間にわたって世界中の28の事例研究が報告されている<sup>11</sup>。もちろん音楽といいながら、そのほとん

<sup>10</sup> 2014年の大会は Uchinaa つまり沖縄で開催され、筆者も基調講演を行ったが、琉球(諸)語の研究は世界的な注目が集まっていると言える。言語学的なバラエティと歴史・社会的背景の複雑さなどがその理由であろう。

<sup>11</sup> <http://www.ogmios.org/conferences/2015/program.php>

どの事例が歌についてのものである。言えることはつまり世界中の危機言語コミュニティで歌が言葉を伝えているが、逆にいうと歌が有効な手段になり得るような伝承の危機が共通しているということでもある。ここでの議論の中心は言語の”preservation”であったとも言える。つまりこれまでの言語伝承は、言語維持”maintenance”を目指してきた。コミュニケーションの手段としての日常の使用に耐えるだけの言語であることを、あるいはそこまで復活させることを目指してきた。しかしながらそれが困難になる言語が多い中で音楽や韻文などの芸能や文学作品の中に「保存」しておくことも議論され始めたと言える。これはもちろん「妥協」だとも考えられるし、「戦術」あるいは事態が好転した際の「備え」とも考えられる。

現在の奄美の日常の中でもっともシマグチが使われる場面が「シマウタ」である。沖永良部と与論島のそれはいわゆる琉球音階で、徳之島以北では和音階でという違いはあるが、ほかの琉球語圏同様シマウタは生活に根付いている。この「根付いている」という感覚は説明しにくい、興味のある・なしはともあれシマウタを聞いたことがない人は子どもも含めていないであろう。シマウタを題材とすることは「瀬戸内のシマグチ」についての聞き取りの中でも複数挙げられた。そこで瀬戸内町を拠点に活動をし、長い間子ども向けに指導もしている永井しずの氏、同じく瀬戸内町在住で高校生の頃から一線で演奏活動をしている米田みのり氏、瀬戸内町出身で現在は関西を拠点に演奏活動をしている里朋樹氏に出演を依頼、快諾を得てシマウタを中心としたコンテンツを作成することになった。そしてこれらを「シマウタとうシマグチ」とタイトルすることにした。

特に永井氏の参加は、普段シマウタに絡めてシマグチを教えている経験からのアドバイスをもらうことができた。「シマウタとうシマグチ」の構成に大いに助けになった。

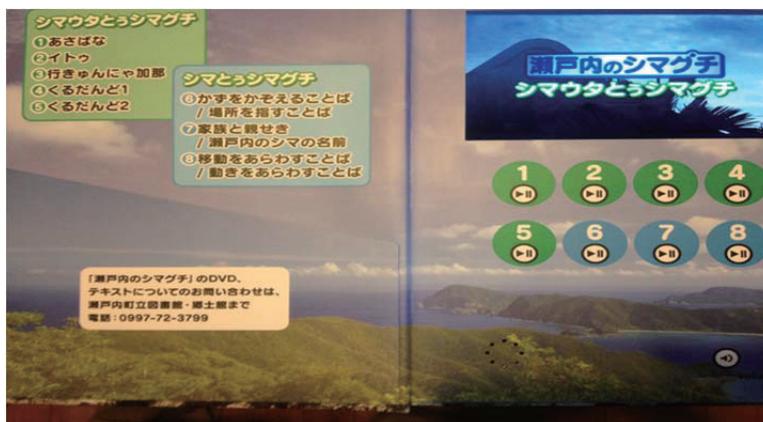
## 10-2 コンテンツ作成②～再編集とテキスト

1-4, b で述べたように「瀬戸内のシマグチ」では多くのタイトルを盛り込んだが故にそれぞれの狙いがぼやけてしまったきらいがある。そのなかでも特に独立したコンテンツとして教材として抜き出すことができ、時間も短く編集できるものを再編集することにした。序数詞と指示詞を扱った「数をかぞえることば・場所を指すことば」、親族呼称と漢字表記導入以前のオリジナルの地名を扱った「家族と親せき・瀬戸内のシマの名前」、移動に関する起点・終点、動詞のテンスとアスペクト、動詞の活用を扱った「移動をあらわすことば、動きをあらわすことば」の3

タイトルを「シマとうシマグチ」として再編集することにした。またこれらのタイトルの選定の基準として、字幕スーパーだけで見られるかどうかということも検討した。「瀬戸内のシマグチ」では書き起こしのテキストをつけ、それ故に「本」だと捉えられたことは既に述べたが、大きな方針の転換としてテキストをつけないという決定をした。そのため「シマウタとうシマグチ」も全部字幕で処理をすることになり、その上で唄者たちと構成を考えることになった。

## 11 メディアとデバイスの問題の解決策

DVD でコンテンツを配布することを巡る問題は制作に入っても解決しないままであった。前回同様 DVD にすることを考えていたところに、新しい形のデバイス、電子ブックの情報を得た。商品名は Book de Movie<sup>12</sup>というそれは、本来は販促などのプレゼン用のツールとして開発されたものである。素人が一言で表現するとすれば、ネットにつながらないタブレット端末である。DVD の代替案として最初に考えたのは web へのアップであったが、瀬戸内町ではまだネット環境が整備されていない。wi-fi もきわめて限られた場所にしかなく、スマホやモバイル PC なども、子どもや若者が都市部ほど持っていると考え理由がない。開発者のはなしでは、ネット環境のないところで動画を見ることに特化したために、現在の形になりしかも比較的安価に製品化できたとのことであった。コンテンツの配布と同時にそれを見るデバイスも配れるという意味では我々が求めている形であった。これで子どもたちにも、もちろん大人でもすぐにコンテンツを見ることができるようになった。さらにもう一つの課題の解決策ともなった。すなわち「集まって見る」という縛りから解放され、一人でも少人数でもコンテンツを見ることができるようになったのである。新しいデバイスの提案で子どもたちの興味をひくことも期待される。



<sup>12</sup> <http://www.tarohs.net/bookdemovie/index.html> に詳しい。

## 12 「瀬戸内のシマグチ」の経験から

今後時間をかけていろいろな層の人々に意見をもらい、ネイティブ世代ではない人にもシマグチの導入の「送り手」となり得る可能性を模索したい。またここで制作したコンテンツ群は、web 上での公開も想定して作られている。アーカイブする、あるいは教材として公開することについても十分対応できるはずである。どのようなコンテンツがもとめられているかだけでなく、こちらがどのような提案をすれば学習者や伝承活動に関わる人々の活動に寄与できるかは常に考えるべきで、それは言語学的な研究の興味や目的と必ずしも合致するとはいえない。研究者のためのアーカイブやサイトではないことを目的とするのであれば、この二つの試みでためしたような現場の人々の計画段階からの参加が望ましいとも考える。

## 13 コンテンツの一例

以下にあげるのは、「瀬戸内のシマグチ」の中での古仁屋編 5-3 から、談話の書き起こしと日本語訳、音声記号である。実際の映像とともにこのテキストが参照できるようなインターフェイスの工夫でいろいろな用途に対応できると考える。

さらに単語単位ではないため、用法や文イントネーションなどもわかりやすい。

瀬戸内ぬシマや 56 ぬ村々はら合併し なとうりよばん。  
 [seto:tinuʃimaja] [gozurokunu: muramurahara gappe:ʃi]  
 [nattor<sup>j</sup>omban]

瀬戸内のシマは、 56 の村々が合併して 成り立っている。

ちきやぎよろや 人口だろ わろ一ひなてい 古仁屋ぬシマなんていや  
 [tɕik<sup>j</sup>aguroja] [ziŋko:darɔ] [waro:ɕina:ti] [kuŋpanuʃimananti]  
 最近は、 人口が かなりすくなくなつて、古仁屋の街だけは、

もともと 8,000 人べへりだろうちいうすが なまや  
 [mutumutu hassennimbeheridaro:tɕi:usuga] [namaja]

もともと 8,000 人くらいいただろうと言われていたますが 今では

あんまり古仁屋ぬシマ 変わんばむ 各田舎田舎や  
 [ammari kuɲanʃima] [kawarambam] [kakwina:kaina:kaja]  
 あまり古仁屋の町では 変わっていないが 各集落では

にゃー とうまりひなてい 学校もねんぐとうしないような状態なてい  
 [ɲa:] [tumari ɕina:ti] [gakkom neɲɲurɯʃinainjo:na zo:tainati]  
 かなり 人口が減少して、 学校がなくなってきている状態になって、

こりゃ つまらんくとうりやすかちゆて 心配しゅんとろ。  
 [korʲa] [tumarən kʰuturʲasukatɕute] [ʃimpai ʃuntoro]  
 これは 困ったことだと、 心配しているところです。

また くん古仁屋や 各シマジマぬちゅんきやぬ かんうってうもち  
 [mata] [kun kuɲaja] [kʰakuʃim�imanuɕuɲkʲanun] [kanʔutteumotɕi]  
 また、 この古仁屋は、 各集落（シマジマ）の人達が こちらへ移ってきて、

古仁屋ぬ町や形つくらっておる うらうむうんちょう。  
 [kuɲanumatɕa kataɕitukurateurʲa:] [uramuntɕo]  
 古仁屋の町はできている、 そのように思います。

きゅうや 各シマジマはら かんうってうもちゃん代表し  
 [kʲuɲja] [kʰakuʃim�imara] [kanʔutteumotɕan daiɕo:ʃi]  
 今日は、 シマジマから、 こちらへ移ってきた方々を代表して、

にんじよばあまていもろうてい 各シマジマぬむんがたり  
 [ninjyoba atumatimora:ti] [kʰakuʃim�imanun muɲgatarɪ]  
 何人かの方に集まってもらって、 シマジマの物語、

各シマジマぬくとうばぬ流れ くとうばぬちげえ  
 [kʰakuʃim�imanun kʰutubanunagare] [kʰutubanw ɕige:]  
 シマジマのことばのうつりかわり ことばの違い、

うがしゅん                      まあ 収録しゅんちことうだりょうおんから  
 [ugaʃuɴ]                      [ma:]      [ʃu:rokuʃuntɕu:kutudarʲoŋkaran]  
 そういったものを              まあ              収録するということですから、

なまはらわんが なんにやりやなんにやりや              よーりこらよーりこら  
 [namahara] [waŋya]              [naŋpananpana]              [jo:riɡʷanajo:riɡʷana]  
 今から、わたしが              少し少し、              ゆっくりゆっくり

たずねむんしんしりや              各シマジマぬくとうばば  
 [tatnemun ʃi:ʃirʲa]                      [kʰakuʃimazimanun kutubawa]  
 質問をしたりしながら、              各シマジマのコトバを

ふっくでいもればしややち うもていうりよむん  
 [ɸukkudemoregʷaʃa:ʃi]      [umutturʲo:mun]  
 記録してもらいたいと              思っています。

うん やっぱ シマジマぬ水ぬ流れぬ 変わりゆんぐとうし くとうばだか  
 [ʔun] [jappa][ʃimazimanu mitnagarenu kʰawarʲuŋŋutʷʃi][kʰutubadakʰa]  
 うん やっぱり シマジマの 水の流れが 変わるように、ことばも

全部変わゆんからん              うるや 自然だりょうばん はげえー  
 [zembukʰawarʲuŋkanan]      [urʲa]      [ʃigendarʲo:ba] [haye]  
 みんな変わるから、              それが 自然だろう。              うわー

あまのちゅうのくとうばぬうむしろさ  
 [amanuʧuunʷ kʰutubanʷʔumuʃirisa]  
 あのひとの言葉は面白い、

くうまぬちゅうぬくとうばやわしやとういっち  
 [kʰumanuʧuunʷkʰutubaja wa:ʧatwiʲitʃi]  
 このひとの言葉は悪い、

ちゅぬしまぬくとうばば へんなことある 不遜しやり  
 [tɕunɯfimanɯ k<sup>h</sup>utubawa] [hennakuta:ɾɯ] [ɸɯsɔŋʃa:]  
 人のシマのことばは 変だよねと 不遜なことを言うとか、

うがししゅんくとうやあらんど。

[ɯgaʃiʃunnarando]

そのようなことをするのではありません。

そもそも「自然談話」という考え方自体が言語学者のためにあるような不遜なことばだと考える。研究者がその場に居ることが既に「不自然」であると考えないこともそうだ。研究の材料として誰かのことばを切り取る必要はあるのだが、そのためにことばは存在しているのではないということをいつも忘れてくれないと考える。

#### 14 結語

少数言語・危機言語の継承の方法は世界中で模索されている。決定的な方法や理論が見つかっていないというのが現状である。だからこそ色々な方法を試し、失敗も含めて積み上げていくことが必要だと考える。今回の試みも完成度を問うにはまだ少し早い。様々な方法を地域に提案し続けることでまた新たなアイデアも生まれるであろう。それが外部の研究者からでなく、地域社会、「シマ」から出てくることが理想なのであるが。

ひたすら記録を積み上げるというアーカイブの役割とともに地域社会に還元できる成果をと考えたときに、この試みで得た知見は役に立つと考えている。

前田達朗 2006 「奄美大島瀬戸内町における『シマグチ』伝承活動-ひとびとの言語意識のてがかり」

『多言語社会研究会年報 4号』PP5-29 三元社

前田達朗 2010 「『経験』としての移民とそのことば」 「ことばと社会」12号 特集 移民と言語②PP129-153 三元社

前田達朗 2013 「奄美方言の小学生向け映像教材の開発とその活用法についての研究」『2012年度第7回児童教育実践についての研究助成事業 研究成果報告集』博報財団 明治書院

前田達朗 2016 「社会教育コンテンツとしての奄美語継承活動とその方法の研究」『2015年度第10回児童教育実践についての研究助成事業 研究成果報告集』  
博報財団